



関西ECOMAIL

環境教育学会関西支部から関西の会員の皆様に、ワークショップのお知らせと関西の環境教育に関わる情報交換をしていただくために発行しています。

また学会員外の方々に環境教育に関心を持っておられる方や実践をされている方のコミュニケーションも広く図りたいと思います。

1000円の通信費(1年分)をいただきましたら、ワークショップの案内葉書とECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振込先…郵便局「大阪 9-37886」環境教育学会関西支部)

関西ワークショップのお知らせ

連絡先：大阪教育大学環境科学教育研究室 (☎ 06-771-8131 内線 417)

第14回 12月7日(土) 2:30 pm ~ 5:00 pm

話題提供 山田弘司さん (日本非鉄金属商工連合会)

「宗教思想と環境倫理」

会場：大阪教育大学(天王寺)第12教室(1階)

(JR環状線寺田町駅下車 西へ徒歩3分、または天王寺駅下車 北東へ徒歩7分)

第15回 1月25日(土) 1:00 pm ~ 4:00 pm

環境教育シンポジウム 「環境教育から余暇教育を考える」

会場：大阪府立文化センター (詳細は追ってお知らせします)

第16回 2月22日(土) 2:30 pm ~ 5:00 pm

話題提供 本庄 眞さん (奈良県東榛原小学校)

「楽しい自然環境学習」

会場：大阪教育大学(天王寺)第12教室(1階)

第17回 3月28日(土) (テーマなど、詳細は追ってお知らせします)

第11回ワークショップ (1991.7.13) 報告

自然概念と環境倫理

VTR「淡路島モンキーセンターからの報告——奇形ザル問題を追って……」

谷口文章 (甲南大学)

1. 自然概念

まず自然概念を、外的環境としての「物理化学的自然」、外的環境と内的環境を媒介する「生命的自然」、人間の内的自然である「人間的自然 human nature=人間本性」の三つの概念を提示したい。

次に歴史的に考察すると、古代西洋では、自然を表すピュシス (ギリシャ語)、ナートゥーラ (ラテン語) は誕生、生まれたままの性質、本性を意味し、人間は自然とともに生きていた。中世のキリスト教思想では、神が自然を創造し、人間の下に位置する被造物であるとされた。近代での自然は、ガリレイやデカルトによって、隠れた性質や実体的形相を排除した質料のみになり、現代的な意味で“生命なき物質”という意味におとしめられた。それとともに近代自我の形成によって、自然に対する人間の優位が理性的次元で確立する。その後現代にいたるまで、自然の開発や征服は自由であるとする人間中心主義の考えが続いた。

しかしながら、外と内を媒介する「生命的自然」の原点にもどると、生物リズムは、外において宇宙のリズムと連なり、内においては精神のリズムを形成する基盤であることがわかる。したがって物質 (物理化学的自然) - 生命 (生命的自然) - 精神 (人間的自然) の連鎖は、第一項が劣位で、第三項が優位であるのではなく、その連鎖は生命を原点とした“生きた環境”においてあることを自覚する必要がある。

2. 環境倫理

環境倫理が要請されるのは、人間的自然である「人間本性」の歪みが、外的な環境破壊・公害、そして内的精神病理を生み出して、人間存在の存立基盤が揺らいでいるという危機感を人々が感じ始めたからである。その根本の原因は、人間中心主義的発想の結果である「文化のフェティシズム」であると考えられる。環境倫理の理論に関して、フェティシユな幻想を現実にもどし有効な理論を提供するものとして、ヘアの道徳哲学が参考になる。ヘアはカントの形式主義の論理に功利主義の実質を入れて倫理学体系を組み上げ、カント的一般原則を「指示性」と「普遍化可能性」によって具体的な限定原則に鮮えらせた。この理論を環境倫理に適用すると次のようになる。カントの「『他の人間』を決して単に自分自身の目的の手段にするのではなく、それ自体における目的として扱うべきである」という定言的命法の命題は、「他の人間」を「自然」に代置することによって、より広くより具体的に、自然に対する人間の責任倫理の基礎づけになる可能性が開かれよう。つまり、自然は人格と同様に、単なる手段ではなく人間存在の存立基盤という絶対価値であり、目的自体なのである。

3. 環境教育の一環としての奇形ザル調査——淡路島モンキーセンターからの報告——

私たちの研究室では、環境問題を追って1983年以来、一方で淡路島モンキーセンター、京大霊長類研究所、犬山モンキーセンター、小豆島奇形ザル調査、相思社水俣病センター、砂田明氏「現代夢幻能：天の魚」公演、「原爆の図」の丸木夫妻との対談などの「教育」活動を行い、他方、その現実的対処として自然農法家福岡正信氏、慈光会の梁瀬義亮医師、有機農法家金子美登氏のそれぞれの農園を訪れ、生命ある「環境」を実感してきた。

1990年8月、淡路島モンキーセンターを再び訪れた私たちは、今もなお発生する奇形ザルの新生児を眼のあたりにして顎然としたのであった。この年、新生児40頭のうち6頭が重度四肢奇形であった。それをVTRによって報告する。

ニホンザルの四肢奇形発生にはi)餌づけ群に多発、ii)広域分布性、iii)家系集積性、iv)統計上有意な年次変動がみられる（四手井綱英編「ニホンザルの奇形に関する総合的研究」）。原因は同定できないが、有機塩素系のディルドリン、ヘプタクロル、エポキシドなどの残留農薬が奇形個体から見出されていることは、注意すべきことである。

4. まとめ

もともと、神や大自然にも一体化できる人間的な自然＝人間本性に、自己中心的な自我のパーソペクティブによって歪みが生じた。それが実体化し外化され、私企業や社会制度となって“正しいもの”として固定化されたため、物神崇拜、切片崇拜などのフェティシズムの虚妄の世界に生きることとなった。そこでは、排他的な社会、自己完結的な個人が、閉鎖系の論理でもって個人の幻想を追いながら生きている。しかし人間は本来、定常開放系に生きており、自己同一性を定常的に維持しながら生命を保っている。生きた環境に根差し、そこから生命を汲み上げながら、人為的な閉鎖系としての社会経済活動に参加して生活している。その意味で、科学や経済学の基本原理が閉鎖された理論の上に成立した限界のあるものであることを自覚し、放出されたエントロピーを減少させて水・大気・生命循環を維持している自然環境に今一度思いをいたす必要がある。大切なことは人間と同じように、地球的自然も定常開放系であることを自覚することである。つまり、人間やその社会が排出するエントロピーを宇宙へと放出していることで定常性を維持していたが、現代では、人間本性の歪みが過度となってナルシズム的・自己中心的人間が多数存在することとなり、無限にエントロピーを増大させている。自然環境においてエントロピー解消の限界を超え放出しきれなくなって飽和点にあることが、切実な問題である。この意味で、人間のみならず生命ある自然を「手段」としてではなく、「目的自体」として考える環境倫理の発想が要請される。そのためにも、人々が五官を通じて統合できる「共通感覚」の覚醒が必要となる。自然との共鳴、共振、共生のためには、人間本来がもつ交感（コミュニケーション）の感覚を目覚めさせなければならない。こうして現代こそ、物質でも精神でもなく、生命のリズムを感じとれる等身大の価値基準に生きなければならない時代と思われる。



京都発「里山自然便」 法然院 森の教室

代表世話人 久山喜久雄

京都市の都心から間近に望める東山の峰々、そのひとつに夏の京都の風物誌「五山の送り火」で有名な大文字山があります。ここが、私たち森の教室のフィールドです。京都は三方を山で囲まれた典型的な盆地です。その為山々からの恵みは人々の暮らしに欠かすことのできないものでした。しかし、昨今は生活スタイルの変化に伴い、人々は身近な山々と段々と距離を置くようになりました。一方、私たちの身の回りでは自然環境や生活環境に対して関心が高まりをみせています。私たちはそれらに対して、改めて、里山など身近な自然に接し、様々な人々と語り、交流することによって「あなた」「わたし」ととの自然観を見つめ直す機会を持ちたいと思いました。その想いは、1985年11月から始めた「森の教室」の活動で具体的に実践していくことになりました。

森の教室の始まりは、法然院住職の梶田さんとの出会いにあります。お寺にも「新しいコミュニティの場を設けたい」というユニークな発想をお持ちであった梶田さんから、お寺の森を野鳥観察のフィールドにしていた私に相談があったのが事の起こりです。

活動は、月1回の室内又は野外での例会、誰でも自由に参加できるオープンスクールで自然観察から音楽、文芸までとにかく、身近な自然との接点を見つけての話題提供は飽きない内容になっています。そして、身近な森の生き物調査、今までに「ムササビ」や「モリアオガエル」などの調査をやってきました。さらに、子供たちとの活動「森の子クラブ」を2年前から設けています。こちらは会員制で年間20回程のプログラムを用意しています。今年はおプションスクールとして、「北海道、大自然冒険ツアー」なども実施しました。そして、長野県開田村にある森林セミナーハウスにも毎年でかけていて、楽器づくりや冬のスキー教室などのプログラムも組んでいます。

今年は私たちの活動にとって、新たな出発点となる事がありました。朝日森林文化賞の受賞と「フィールドガイド大文字山」（ナカニシヤ出版）の出版です。今後とも「新鮮さ」をお届けできる京都発里山自然便をモットーに、益々、責任ある活動を果たしていかなければならないと思っています。

ご連絡は……(075)771-2420 法然院内 森の教室事務局へ

～評判～

大文字山近くの山裾の広い自然林を境内に持ち、フクロウやアオバズクの声聞くことのできる法然院を中心に、それらの保護活動を行って、地域の話題となっている。こうした人々とフクロウとの交流は、エジンバラ公の言葉を借りるまでもなく、個人、家族あるいはグループでできる、自然の保全への活動の素敵なモデルである。 飯野徹雄著 中公新書「フクロウの文化誌」より



「かけがいのない地球を大切に」

— 持続可能な生活様式実現のための戦略 —

(Caring for the Earth: A Strategy for Sustainable Living)

去る10月21日、国連環境計画（UNEP）、国際自然保護連合（IUCN）、世界自然保護基金（WWF）により、「新世界環境保全戦略——かけがいのない地球を大切に」が世界各地で同時に発表されました。

前の「世界環境保全戦略」は1980年に公表され、持続性あるいは持続的発展といった考え方が世界に広まるきっかけとなりました。生物や自然保護、資源保全の問題が主に取り上げられており、その後、50ヶ国でこれに基づき国ごとの戦略がつくられるなど、大きな影響を持ちました。

「新戦略」は、今日、世界最大の政策課題との一つと言われる地球規模の環境問題を踏まえ、来年6月の「国連環境開発会議」（UNCED、地球サミット、ブラジル）に向けて発表されました。「人類は地球の収容能力の限界内で生活しなければならない」とし、「持続可能な生活様式の倫理の実践」と「保全と開発（発展）との統合」を唱えています。そして、生命共同体倫理の構築と実践、低所得国での生活の質の改善、生物の多様性の保全、個人の生活様式・習慣の改革、開発と保全を統合した経済・社会政策の策定、地球規模での協力体制の確立などの必要性を訴えています。

今後の環境教育のあり方を考えていく上で、この「新戦略」は一定の重要性を常に持ち続けるものと思われます。まもなく日本でも全文訳が出版されるそうですが、以下に「新戦略」本文の目次を紹介しておきます。

- 第1部 持続可能な生活様式実現のための基本原則
 - 第1章 持続可能な社会の建設
 - 第2章 生命共同体の尊重と保全
 - 第3章 生活の質的改善
 - 第4章 地球の活力と多様性の保全
 - 第5章 地球の収容能力の限界内で
 - 第6章 個人の生活態度と習慣の改革
 - 第7章 それぞれの環境を守るような地域社会に
 - 第8章 開発と保全とを統合する国家的枠組の策定
 - 第9章 地球規模の協力体制の創成
- 第2部 持続可能な生活様式実現のための行動
 - 第10章 エネルギー
 - 第11章 ビジネス、産業および商業
 - 第12章 人間居住
 - 第13章 農耕地および放牧地
 - 第14章 森林地帯
 - 第15章 淡水域
 - 第16章 海洋および沿岸域
- 第3部 実践とフォローアップ
 - 第17章 戦略の実施

ネット・ワーク



(1) 「91年人権平和フォーラム 共に生きる市民の聲い わが街ウォッチング」

11月24日(日) 「障害」を持つ人々と共に、街の環境を見つめます。

詳細は、豊中市立中央公民館 (☎ 06-866-0555) までお問い合わせ下さい。

(2) 「第1回 環境教育レンジャー・トレーニング・ワークショップ」

12月21日～23日(土、日、祝) 場所：関西学院千刈キャンパス

テーマ：ネイチャー・トレイルの可能性 ゲスト：小河原孝生(生態計画研究所)

対象：ビジターセンター職員、青少年関係施設・団体、行政担当者、教師、学生、

インタープリターを目指す人、その他興味をお持ちの方々。

主催：関西学院、SMILE人間/環境教育プロジェクト(SHEEP)

問い合わせ、資料請求先：関西学院千刈キャンパス (担当：岡)

(☎ 0795-63-5233 Fax 0795-63-5235)

(3) 「NACS-J 自然観察指導員講習会 大阪」

1992年5月23日～25日 定員50名 詳細は、追ってお知らせ致します。

受講することにより、「自然観察指導員」の認定を受けることができます。

主催：日本自然保護協会(NACS-J)、大阪自然環境保全協会

環境ワークショップの話題提供者(報告をお願いできる方)を募集しております。
また、どのようなテーマでのワークショップ開催が望ましいか、あるいは講演以外に
どのような形式のワークショップ開催が望ましいかなど、関西ワークショップに対す
るご希望なども、関西支部事務局までお寄せ下さい。(連絡先はこの頁に掲載)

★ 関西ECOMAILへの投稿を募集しています。

★ また、ネットワーク欄への情報提供もよろしくお願い致します。

関西ECOMAIL 第9号 1991年11月15日発行

通信費 一年 1000円

編集 日本環境教育学会関西支部世話人会

発行 日本環境教育学会関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室 (鈴木善次研究室)

〒543 大阪市天王寺区南河堀町 4-88 (☎ 06-771-8131 [内線 417])

次回 第10号 1992年1月15日発行予定 原稿締め切り 92年1月5日